

「改心と回心」

主任司祭 晴佐久 昌英

少女が部屋の隅のゴミを掃除している。

小さなゴミが箒ではうまく掃けず、しゃがんで一つひとつ、ていねいに指でつまんでは捨てている。不思議に思ってパパが尋ねる。

「何でそんなにきれいに掃除してるんだい？」

少女は振り向きもせず言う。

「きれいにしないとパパに叱られるから」

パパはあきれて言う。

「何言ってるんだ、そんなことでパパが叱るわけないだろう。もう十分きれいじゃないか。いい加減にして外にでも遊びに行っておいで」

ところが少女は、今度は机の上を拭き始める。何度拭いてもホコリが残ってしまうので、いつまでも拭き続けている。ママが尋ねる。

「何でそんなに一生懸命拭いてるの？」

少女は悲しそうに答える。

「一生懸命拭かないとママに嫌われるから」

ママは笑って言う。

「やあねえ、そんなことでママが嫌うわけないでしょ。あなたのこと大好きなんだから、変な心配しないでちょうだい。ほら、もうご飯よ」

四旬節を迎え回心の季節となった。

「回心」とは、神の親心を信じ、神の愛にすべてを委ねて真の神の子になることである。

似た言葉に「改心」があるが、こちらは自分の非を認め、間違っただけの行いを改めるという意味であり、「回心」とはまったく別の意味だ。

先ほどの少女で言うならば、見苦しいゴミをきれいに掃除し、汚れたホコリを一生懸命拭くのが「改心」であり、たとえゴミが散らかっていてもパパは許してくれるし、ホコリを拭くのを忘れていてもママは愛してくれると信じて安心するのが「回心」である。

この二つを混同し、改心しても回心できず、神の無限の愛を知らずにいるキリスト者がいかに多いことか。確かにゴミがない方が多少は気分いいかもしれないが、ゴミは必ずまた出るのであって、改心には真の喜びも安心もない。人が本当に救われるのは、ゴミがあろうとなかろうとわが子を愛している天の父の親心を知り、信じて感謝する以外にないのである。

神は、「回心」を望まれている。